

高齢者の生活環境内で生じる日常災害の 最近の実態に関する調査

○矢島 規雄^{*1} 直井 英雄^{*2}

Survey on building related accidents occurred in life environment of elderly people

YAJIMA Norio^{*1} NAOI Hideo^{*2}

■研究目的■

日常災害の実態を把握するための研究は過去にも行われているが、災害弱者である高齢者に着目したものは少ない¹⁾。本研究では、『NPO法人 住まいと介護のコミュニティネット』『長寿社会文化協会 (WAC)』と協力し、高齢者の日常生活における事故の最近の実態を調査し、住宅改修など高齢化社会に対する取り組みの参考資料としてとりまとめたので報告する。

■調査概要■

(1) 調査対象

社団法人長寿社会文化協会 (WAC) 会員の60歳以上1591人とし、60歳以上の同居者がいる場合はその人にも回答してもらった。

(2) 調査項目

(a)回答者の年齢・性別 (b)過去3年以内における外因事故の有無 (複数ある場合は最近の2件) (c)事故の種類 (d)発生時期 (e)発生場所 (f)ケガの種類 (g)ケガの部位 (h)ケガの処置 (i)事故の改善策 とした。

(3) 調査方法

郵送によるアンケート調査

(4) 調査実施時期

2001年 (平成13年) 9月11日～10月10日

■調査結果および考察■

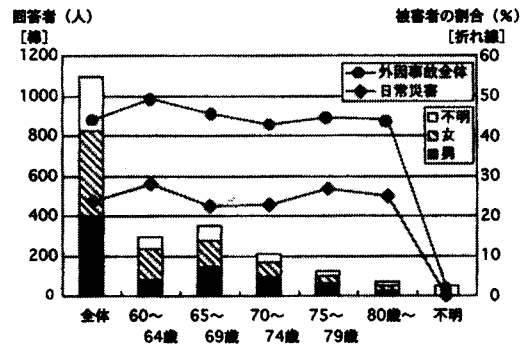
郵送1591通のうち返送755通 (回収率47.5%)、有効回答数1094であった。そのうち外因事故全体では481人 (609件)、日常災害では258人 (294件) の回答が得られた [図1]。その集計結果及び考察を以下に示す。なおここでいう外因事故とは屋外で起こった交通事故等を含めたものとする。

(1) 外因事故の種類別割合 [図2]

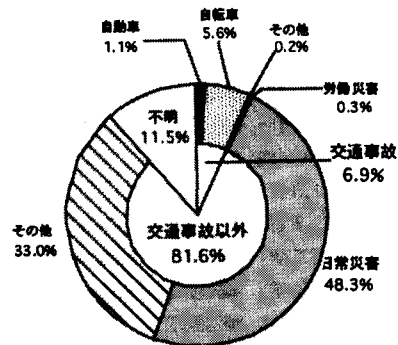
外因事故全体で見ると、「日常災害」の占める割合が約半分と大きいことがわかる。また、グラフには記載していないが、次に割合の多い「交通事故以外のその他」では、その半分強が車道や歩道など外出先での転倒事故であった。

(2) 日常災害の発生場所割合とその内訳 [図3]

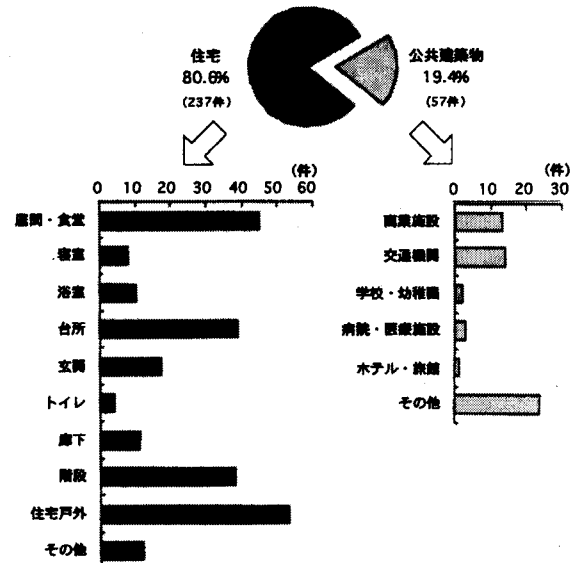
日常災害の発生場所割合では、住宅が約8割を占めている。その内訳をみると、庭等の「住宅戸外」での事故が最も多く、住宅での事故の約4分の1である。過去の調査 (総年齢層/住宅のみ) においては、住宅戸外での事故



▲図1 年代別の回答者人数と被害者の割合



▲図2 外因事故の種類別割合



▲図3 日常災害の発生場所割合 [上] とその内訳 [下]

は5%程度なので、これは大きい値であるといえる。その他では「居間・食堂」や「台所」など、滞在時間が長いと思われる場所がやはり多い。公共建築物の中ではスーパーなどの「商業施設」や駅などの「交通機関」が多い。

(3) 日常災害種類、ケガの種類・処置および

過去の調査（総年齢層）との比較

i) 日常災害種類について [図4]

階段・段差等の高さが原因となることが多い事故である「墜落」「転落」「転倒」の割合が多く、その3種で7割近くを占めている。過去の調査結果と比べてみても、その割合が多いことがわかる。

ii) ケガの種類について [図5]

過去の調査結果と比べて、「打撲」「骨折」の割合が多く、「すり傷」の割合が少ない。高齢者は身体的に弱く重度なケガを負いやすいのではないかと考えられる。

iii) ケガの処置について [図6]

病院へ行った割合が約40%と、過去の調査（約8%）に比べてかなり多い。治療したものが即ケガの程度が大きいとは限らないが、ii)の結果を裏付けるものともいえる。

(4) 日常災害（軽傷）の発生頻度推定値 [図7]

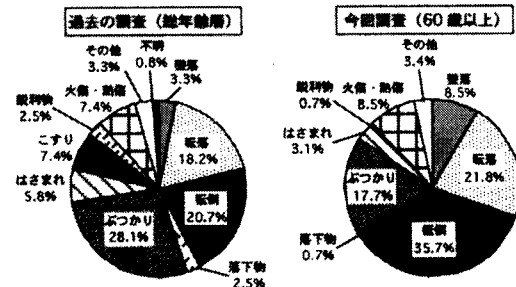
調査した日常災害の発生時点から調査時点までの期間の2倍が平均的には発生周期に相当すると考え、発生頻度を求め^{注2)}、過去の調査における推定値^{注3)}と比較した。今回調査（60歳以上）の推定値は、過去の調査の推定値に比べて小さい値となっている。これは、調査期間が過去の調査では調査時点前1ヶ月としているのに対し、今回調査では調査時点前3年としている違いが出ているとも考えられるので、高齢者の日常災害（軽傷）が実際に減少しているとは断定できない。

(5) 日常災害の改善策の有無 [図8、図9]

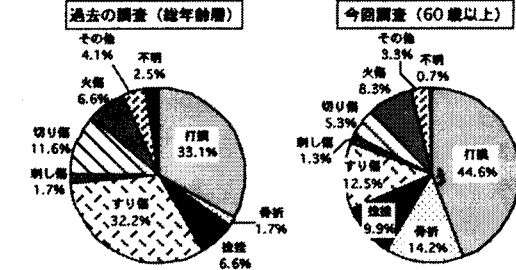
日常災害にあつて、何らかの改善策を講じた人の割合が36.5%で、その中の3分の1弱（全体で見ると10%）の人が建築的な改善を行っている。最近バリアフリーに対する社会的な意識が高まってきているので、改修例が増えていくかもしれないが、それに関しては過去の調査がないため確認できない。

■まとめ■

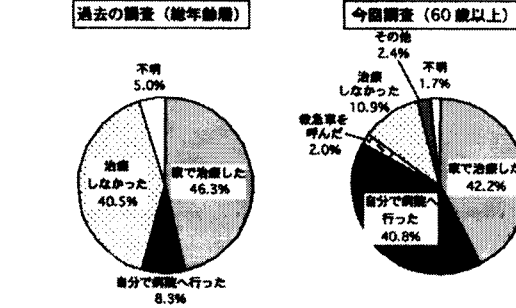
本研究により、高齢者の日常生活における最近の事故の実態が、ある程度明らかとなった。この結果は、今後の居住環境整備の参考資料になりうるものとする。なお、本研究に際し、平成13年度東京理科大学修士中島優氏、卒研生門池恵子氏、野月夕香里氏、および『NPO法人 住まいと介護のコミュニティネット』『長寿社会文化協会(WAC)』の方々の協力を得た。ここに記して謝意を表す。



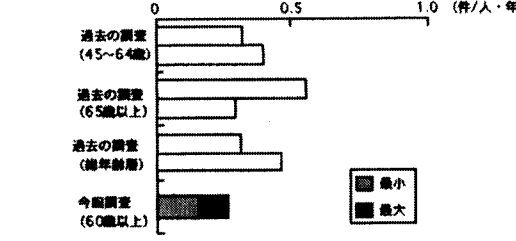
▲図4 調査結果の比較（日常災害種類）



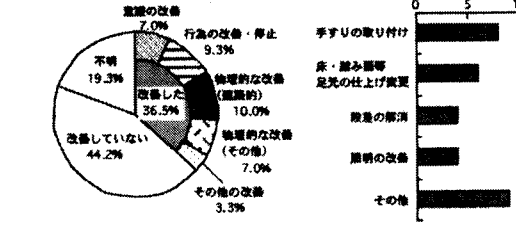
▲図5 調査結果の比較（ケガの種類）



▲図6 調査結果の比較（ケガの処置）



▲図7 日常災害（軽傷）の発生頻度推定値



▲図8 改善点の有無

▲図9 建築的な改善の詳細

- 注1) 建築分野で公表された高齢者を対象とする調査としては、以下のものが、ほとんど唯一のものではないかと考えている。
林玉子、児玉桂子：「高齢者における住宅の安全性と住宅内事故に関する研究（その1～6）」関東支部研究発表論文（1986）、日本建築学会学術講演梗概集（1986、1987）
- 注2) 無事故の回答者については、調査期間以前に全員が事故を起こした場合を最大、起こさなかった場合を最小の推定値とした。
- 注3) 2種あるのは2種のデータ（「千葉工大調査/1978」「直井研究室調査/1979」）を用いたためである。
- 参考文献：「日常災害の実態把握のための調査研究」/鈴木一美・長谷川俊夫 /1979年度東京理科大学卒業論文

* 1 東京理科大学助手（工修） * 2 同教授（工博）